
MOON-4 夜叉 5

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 5

【コード】

N5092M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

秀を狙う『闇』の手が裕希にまで伸びる。青年の目的は、桜の目的は？

和人と秀を中心として運命の歯車が月の光を借りて廻り始める。

ヴァンパイア
現代版吸血鬼伝説 MOON 夜叉 5話目です。

榊 - 2 (前書き)

あ” - 第2部の原稿間に合うかなー (| ¥) 。 。 。

深夜 - - 大京町のマンションで。

4人はカウンターキッチンを囲んでいた。

「朝子に何もなかったのが幸いだな。」

アイス・キリマンをすすりながら秀が言う。

「あいつはタダもんじゃない。」

「どうして？」

裕希が尋ねる。

秀は、

「同じ『野生』のカン。」

少年にウインクをしてみせる。

「じゃ、何故堂々と和人の所に来なかったのよ。裕希くん、関係ないじゃない。」

朝子が怪訝そうに言う。

「たぶん、俺以外にももう一つ『目的』があるんだろう。」

形の良い顎の下で手を組み、和人は答えた。「例えば、今、秀が追ってる奴。」

「げっ！」

秀は身を引いた。「どうして、それを、和ちゃん。」

「ばればれでしょ、あなたのその態度。」

朝子は呆れた様に言った。「正直に白状しなさい、秀。」

「判ったよ・・・」

秀は深い溜息をついた。「俺が追ってるのは九桜の『側』の一人。」

「何だ、秀さん。」

パーカー姿の裕希は、「ちゃんと理由あるじゃん、先刻（さき）から和人が秀さんに監視されて外にも出れない、って言っていた。」

「それなら和人に協力してもらえばいいのに。」

長い髪をGパンの腰辺りで揺らし、

「貴方だけで探せる相手じゃないみたいなんですよ？」

「ところが」

秀はコーヒーを飲みながら、「ちょっと訳ありのトコあってね。

和人に

加わってもらったらもつとややこしい事になるの。」

「どういう事だ、秀。」

和人は目を細め、隣の秀に、「何かあったのか、もう。」

「和人は心配しなくていいの。」

秀はのんびり言った。「情報が少なすぎるから俺も手え焼いてるし、

『帝王』が出てきたら話が余計ややこしくなるの。」

「全然判らないよ、秀さん。」

裕希は肩を落とした。「でも、秀さんにも来てもらって昼間は助かったよ・・・ありがとう。」

「どういたしまして。」

軽く会釈をする秀。

その心の中には、『桜』の存在が大きくあった。

「とりあえず、裕希。」

和人は反対側の彼に視線を移し、「お前も当分学校休んで『昼間』も

俺たちといた方がいい。」

「俺も狙われてるってどういうの？」

「多少はね。」

「うーん。」

裕希は思索し、「バスケ部もあるし、バイトは休めるとして・・・

・期末試験もあるしね。」

「期末試験？」

秀は、「どれくらい？」

「再来週から1週間。」

と、裕希が答えると秀は、指折り数えて、

「余裕じゃん。」

そう言った。

「何が？」

朝子が尋ねる。

秀は朝子に振り返り、

「だって、満月まであと3日だろ？その『満月』を利用して和人を狙ってる奴を倒せばいい。」

「俺を狙ってる？」

和人が呟いた。「どういう事。」

「あ。」

言っちゃった、と秀の顔にはそう書かれていた。自爆である。

「……ぶっちゃけて言うと、和人に変わって『帝王』の座に

つこうつていう奴がいるの。でも、『情報』無さ過ぎ。俺もお手上げ状態

……来るのを待つしかない訳。それが『満月』の力を借りて、探し出すか。」

満月に近づくと、秀の野生のカンが鋭くなる……それは、この街の何処に誰がいても見つけられる程。

それが……かつてのもう一人の帝王 九桜が恐れた狼男ウルフガイの本性。

「あの昼間の男の人が、その人じゃないの？」

「違う。もつとすごい奴。」

（九桜の直系だもんない、桜は。）

そして、その『約束』を思い出す。

『和人を倒したら、私のものになって』

狼男ウルフガイにとって『約束』と『契約』は同じレベルであった。

だから、九桜が『光』をも制しようと動き出す前まで一族は2人の『帝王』に『一応』従っていた。

しかし……今は、もう九桜に一族は殺され残ったのはただ秀のみ。

「何考えてる、秀。」

和人は心配そうに、「あまり『闇』の力を使うなよ。お前には『昼の住人』としての生活がある。」

「それは和人も同じ事ですよ。」

秀は苦笑した。「お前を失ったら、『Office To On

e』は食いつぱくれる。」

「こき使うな。」

「何はともあれ、向こうの出方を見た方が利口よ、秀、和人。」

朝子は少し強い口調で2人を戒めた。

「隠れてる九桜の『側』や『帝王』の座を奪おうとするのも数知れないわ。もちろん、和人の事を憎んでる族やからもね。」

「十分、承知。」

和人は頷き、コーヒーを飲んだ。「事情は大体わかった。秀。お互い、

スタンド・プレーは止めて今度の満月を待とう。」

「そうだな、和人。」

秀も頷く。

「そうと決まったら」

朝子は時計に目をやり、「そろそろ寝た方がいいんじゃない？

もう、AM1:00よ、裕希くんも疲れてるでしょ？」

「うん。」

「コーヒーで少し目が覚めてしまったらしいが、昼間の疲れか目がとろん、としている。」

「ねえ、和人。また、和人のベッド借りていい？」

「いいよ、俺たちはまだ寝ないから。」

「うん、じゃ、おやすみ……AM6:00に起こしてね。」

「………って裕希。」

和人はそんな彼に、「明日は親父さんの許可とって学校休む事にしてくれ。遅くても1週間で『カタ』付けてやるから。」

「その間は、俺たちが家庭教師。」

秀はニヤリと笑った。「1日中、応用物理と化学の授業だぞ。」

「げっ！」

裕希はその言葉で目を覚ました。「わかった、和人の言う通りにするから――あと、30分だけ勉強させて、和人。」

「いいよ。」

和人はくすくすと笑った。「朝は同じくAM6:00起き。朝食が終わったら、すぐに復習から入るからね。」

「和人の意地悪！」

裕希は舌をちよつと出すと、

バタン

和人の部屋へ飛び込んでしまった。

「裕希くんったら。」

朝子は微笑を浮かべ、それから少し真顔になり、「裕希くん、このままでいいの？和人。」

「俺もちよつと気になっていたトコ。」

正直に和人は言った。「このまま『闇』との闘いに巻き込む事はできないし。」

「いつそ、学校の寮に戻ってもらおうとか。」

「それは、危ないわ。秀。」

朝子は眉間に皺を寄せ、「誰かがあの子を呼んだのよ、この街へ。結界をはってあるからそう簡単に『闇』の世界を知るまでこの街にいる人はいない――でも、裕希くんはあまりにも私たちと一緒にいすぎて、逆に一人にした方が『闇』に引き込まれてしまうわ。」

「言われてみればそうだな。」

秀が頷く。「でも、いつかはあいつもここから出て行く『存在』だからね……な、和人。」

「ああ……そうだな。」

和人も思案気に頷いた。

この先、裕希の運命はどう変わっていくのだろう。

和人の胸に、暗い影が落ちた。

夜の新宿を和人と秀は走っていた。

「秀、右！」

中空に飛翔した和人は、眼下の秀に向かってそう告げると、自分は左手を差し出しその青白い炎を目の前の吸血鬼ヴァンパイアに向けて放った。

「うぐっ！」

サラリーマン風のその男は炎を浴びると血を吐き、地上に落下した。

その背後からニート風の男性が長い爪を彼に突き出す。

左足で回し蹴りを入れる和人。

月は天空高く浮かんでいた。

いつもとは違う、紅い色を放ち。

「秀。」

和人は地上に降り立ち、秀の背に立った。

吸血鬼ヴァンパイアの人数は約30人……九桜の一族である。

都庁を望む一角で。

2人は彼らに囲まれた。

「キリがないねー、和ちゃん。」

秀が囁く。

「ああ。」

和人は不可思議に思っていた。

『攻撃』がいつもと違う。

ランダムに襲ってきていた吸血鬼^{ヴァンパイア}たちは今は誰かに『統率』されているかの様に次第に彼らを追い詰めていく。

そして……月の光が紅い……

「……………」

和人は暫くその紅の月をじっと見つめていた。「月が紅い。」
そう秀に言っただけ。

「そうだな。」

秀もその『異変』に気付いていた様だ。
そして、

「陰に誰かいるな。」

再び襲って来る吸血鬼^{ヴァンパイア}に蹴りを見まい、

「和人、突き止められるか？ここは俺が引き受ける。」

路上には『灰』になる事を待つ、無数の吸血鬼^{ヴァンパイア}の『屍』。

「……………」

和人は飛翔し、目を細めた。

都庁の向かいのプリンス・ホテルの屋上に向かって『飛ぶ』。

深夜のそこは、静まり返り灯は遙か西新宿の人工灯^{ネオンライト}だけ。

「お前か」

和人はその屋上に立つ、黒いスーツ姿の男性に向かって、「何を狙っている……裕希か？」

「お目にかかれて光栄だよ、帝王。」

青年……昼間、裕希の元に訪れたあの青年が静かに言った。

「お前がああの吸血鬼^{ヴァンパイア}たちを率いているのか？」

「そう。」

青年は微笑んで答えた。

「何が目的だ。」

和人がその左手に青白い炎を宿した時。

「神。」

何処からか少女の声が聞こえてきた。
そして。

あるはずのない桜の花弁が周囲を取り巻いた。

「駄目よ、榊。勝手な事しちゃ。」

少女はその桜の花弁の中から、その幼い姿を現した。

「誰だ！」

と、和人が言うところ『異変』に気付いた秀がプリンスホテルの屋上へと舞い降りた。

「お前は……！！」

和人の言葉に重なる様に秀が叫ぶ。「桜！」

「知っているのか、秀。」

尚も相手に鋭い視線を向けたまま。

「和人、不利だ。」

秀は悔しげに下唇を噛み締め、和人の隣に立った。「あいつは」

「あの桜っていう子は九桜の直系だ。」

「何！？」

「お目にかかれて光荣だわ、帝王。」

少女 桜は無邪気な笑みを浮かべ、「会いたかったわ、秀。」

「俺は会いたかないね！」

秀が舌を出す。

「怒らしちゃった。」

桜は肩を竦めた。ピンクのドレスの周りに同じ色の花弁が舞っている。

「今夜の事は私が謝るわ。榊が勝手にした事だもの。」

と、隣の青年の横に降り立つ。

「お嬢。」

榊が微笑を浮かべる。

それを確認したかの様に、

「でも『今』は闘う時ではないわ。」

桜は目を細めた。「満月じゃないと全力で闘えないでしょ？それに

今度の満月は『紅の満月』……和人にも思い出してもらわなくちやいけない事があるしね。」

「何を。」

和人は桜を睨みつけた。「何を企んでいる。」

「ふふふ……」

桜は微笑んだ。「私、ちょっと欲しいものがあるだけ。」

「桜！」

秀は叫んだ。

「今度の『満月』が楽しみだわ。」

風が突如、舞い起こった。

和人は左手の青白い炎を彼らに向かって放つが桜の花弁を微かにかすっただけである。

ぞぞぞ……

風が。

桜の花びらが彼らの姿を闇にかき消した。

「……」

和人と秀はその去った後をじっと見つめるしかなかった。

紅の月が……妖しく輝く。

榊 - 2 (後書き)

また「ぶつた切り」掲載でいきます(自爆を防ぐため。。。)
(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5092m/>

MOON-4 夜叉 5

2010年10月11日18時02分発行